

日本ペットサミット第3回例会「動物にとって暮らしやすい“家”を考える」

文責：J-PETS 広報 井上

第3回目の例会は家庭で暮らす動物にとって、環境のすべてである「家」をテーマにしました。近年、ペット共生住宅が目立つようになりましたが、動物たちの本来の動きや視点から、どのような家が適しているのか、また、ひとと暮らすうえでどういう点がポイントとなるのか？動物の「動き」を研究している山口大学獣医学部 和田先生と、行動学の視点をもって動物と共棲する住まいの提案をしている一級建築士 金巻先生にお話を伺いました。和田先生は犬や猫の体の動きビデオを紹介いただきながら祖先の行動様式から、筋肉や背骨のつくりがその行動に適したものになっているということ、金巻先生には動物の体と心に負担がないような住環境の事例などを紹介いただきました。犬と猫それぞれの特徴を、違う視点で語っていただきましたが、お二人のお話には全く矛盾がなく理解が深まる内容でした。参加者からの質問も大変活発であり、セミナー後も講師を囲む長蛇の列ができていたほどでした。この例会が家庭動物の暮らしやすさを考えるきっかけになれば幸いです。

【日時】

平成28年7月25日（月） 18:00-20:00 東京大学動物医療センター4階

【講師と各テーマ】

① 哺乳類の形とロコモーション

和田直己氏（山口大学共同獣医学部生体機能学講座教授）

② 家庭動物との住環境を、建築技術と住行動で考える

金巻とも子氏（一級建築士、家庭動物住環境研究家。かねまき・こくぼ空間工房主宰）

【内容サマリ】

① 哺乳類の形とロコモーションから見たペットの住まいとは？



動物とは文字通り移動する、つまりロコモーションを行う生物をいいます。動物を理解するとは、ロコモーションを理解することです。動物種によって体形、大きさが違いますが特に哺乳類はその多様性が著しいグループです。動物は体にあったロコモーションを行います。ですから哺乳類のロコモーションは多様なのです。それが哺乳類の特徴です。

哺乳類の基本的な体形は、長い脚を胴体の直下に伸ばした形です。陸上の動物は地面から力を受けて、立ったり、移動したりします。哺乳類は地面から受けた力が直接胴体に伝わりますから、背骨、四肢が大きく上下、前後運動してダイナミックなロコモーションとなります。哺乳類はい

ま地球上に 5000 種が棲息しています。その半分はネズミの仲間(ネズミ目)です。約 2200 種余りが海洋を除いて様々な棲息域で生きています。様々な棲息域で生きていくには棲息地にあった口コモーションが必要です。ですから同じネズミの仲間でも生息域によって体形、サイズが違います。

私たちの周りにいるペット、イヌやネコの体形と口コモーションの関係はどうでしょうか？イヌ、ネコは共に狩猟を行う食肉目です。イヌは諸説ありますがタイリクオオカミ起源が有力です。オオカミは草原、森林などの地上に暮らし、その速度、持久力に優れた走行能力で獲物を捕らえます。この能力はイヌがイヌゾリ、牧羊犬、狩猟犬に利用されることからわかります。ネコの祖先はヤマネコです。ヤマネコは密林地帯で地上、樹上を生活の場としています。私たちの周りにいるネコの瞬発力とバランス能力は祖先から引き継いだものです。持久力に優れたイヌ、瞬発力に優れたネコの口コモーションの特徴は特にその背骨の使い方を見るとわかりやすい。イヌは(犬種によって異なるものもあるが)背骨を比較的硬くして走行中は頭部を上下動させてシーソー様運動を行います。これはエネルギー消費の面で有利だと考えられます。一方ネコは、四肢の屈曲とともに背骨の屈曲伸展を使って大きな力を発生させます。しかし、この運動は消費するエネルギーが大きくなるという不利があります。このようにイヌもネコも先祖の口コモーションの特徴を引き継いでいます。また動物の口コモーションには様々な感覚が重要です。特に地面と接する脚の裏の情報は極めて重要です。イヌやネコと生活を共にするためには、この動物たちの祖先の口コモーションの仕組み、環境を考慮することが大切です。

- ② 犬や猫を室内で飼育するということが一般的になってくる中で、ペットに対応した住宅というものに目が向けられてきた。しかし、これまでのペット共生住宅というのは主に飼育に關しての課題解決(吠える、汚れる、壊れる等)として設備で対応するものが主であった。しかし、それでは飼育環境は改善されておらず、根本的な問題が解決していない。

そこで、金巻氏は日本の気候や建材、動物観にフィットする共棲住宅を提案している。この棲という字は見慣れないが、すみかという意味で、住宅という小空間でともに暮らすというコンセプトで使用している。



動物に適した暮らしを考える際には、飼主を知ることが重要。犬猫から見た住まい・環境とは、人間も含まれており常に人間を見上げて彼らは生活をしている。家族の動きも環境として動物に影響してくるために、ひとが快適に落ち着いて暮らせる住宅でないと、動物も安心して暮らせないと考えている。

また、住宅を科学すると、ひとの児童の学習能力の発達に、住環境が与える影響が研究されているが、犬猫も同様で、しつけにとって環境がどれだけ手伝えるかということも考えて住宅設計を行っている。快適な室内環境とは、温熱、おと、空気質、光、広さや間といった間であり、それぞれ工夫できる。

犬と猫の飼育環境として重要なのは、優しく頼もしい飼主の行動に加えて安全隠れ家、体に動きに無理がない空間である。隠れ家は空間配分のプランニング、体に無理がない設計は建材で工夫している。

たとえば犬ではプライベート空間（ハウス）、緩衝空間の機能があるセミプライベート（サークル）、パブリック（リビング）のように空間のアメニティが必要。広いおうちであればサークルはなくても緩衝空間はつくられるが、広さに余裕がない場合は、サークルを活用すると同じ機能となる。それぞれの家族と住まいに応じて三楽暮（さんらくく：ケアにかがむなどの動作が少なく、家族にリラックスと楽しみが増えるような）の動線が確保できるような提案をしている。

また、馴染みがない宿泊施設などはさらに隠れ家であるプライベート空間が重要になってくる。金巻氏はそういった宿泊の設計も手掛けている。

猫は犬よりも人との距離があり、猫自身の距離感を大事にすることが重要。ひとは基本的にサルなので抱きしめることが愛情表現となるが、猫はがまんしているだけかもしれない・・・猫が安定とリラックスできる空間は高い所、狭い所。猫が快適に過ごせてそれぞれのタイミングで愛情表現をしてくれるような設計をしている。猫のアスレチックが流行っているが、落下や緊急時に捕まらなくなるなどのトラブルも発生しており、安全で使いやすい設計が重要となる。壁面のキャットウォークに猫の立ち止まりポイントとしてボックスを設置したところ、想定通りそこでくつろぐようになる子が多かった。

建材の使用について、どのような床がいいのか？という質問が非常に多い。しかし、ひとの生活や動き、犬種によっても適している床は違う。用途がキズ防止なのか、滑り止め、関節等に配慮したいのかによっても異なる。近年、性能評価基準のひとつであるすべり係数 C.S.R に犬版の C.S.R・D という指標が開発された。今後、床材選択の目安になるかもしれない。また、調湿建材の活用については 8 月に建築学会において研究報告がある予定である。また、問題行動の対処として、原因となる刺激を特定し、取り除く、慣れさせる、別の望ましい行動を学習させる等があるが、騒音原因となる犬の問題行動に環境整備からも対処するため、住宅内外の音と犬の行動の関連性なども大学の獣医学部と連携し調査している。

以上